

参考事例 ①

家族看護グッドプラクティスアワード 2023年度 家族看護グッドプラクティス賞 応募用紙

※印は記入必須項目です

1. 基本情報	
1-1 ※ 応募代表者	ふりがな ●● ●● (所属施設:)
1-2 共同応募者	●● ●● (所属施設:)
	●● ●● (所属施設:)
1-3 ※ メールアドレス	* 選考や連絡に関して事務局とのやり取りに使用させていただきます ●● @ ●●
2. 応募内容	
2-1 ※ タイトル	研修での学びを家族看護の実践に活用することを目指して
2-2 応募対象 もっとも重視して審査 してほしい視点をお 選びください (1つだけ選択)	<input checked="" type="checkbox"/> 人材育成・教育 <input type="checkbox"/> 設備やシステムなどの充実 <input type="checkbox"/> 看護技術の向上
	<input type="checkbox"/> 実践のプロセスの発展 <input type="checkbox"/> 看護計画の改善 <input type="checkbox"/> 多職種との連携
	<input type="checkbox"/> 患者・家族の満足度向上 <input type="checkbox"/> 職員の満足度向上 <input type="checkbox"/> 取組み評価の体制作り
2-3 取り組み開始年	2019 年 ~ 年
2-4 ※ 取り組みに至った背 景・経緯 (400字以内)	<p>専門職である看護職の継続教育は、施設によって様々な工夫がされている。その中で、院内の集合研修での学びを臨床の場で、いかに実践に活かすことができるかは、大きな課題である。私の所属する施設においても院内内外での研修の学びを知識だけでなく、看護実践能力を高めることに繋げていくための研修の在り方について、検討してきた。</p> <p>その一つである「家族看護」の研修は、受講者が日頃から抱えている家族ケアへの困難さや苦手意識をスタッフ間で共有し、そのような状況の時にどのように対応するのかを学ぶ機会となっている。この学びをさらに深め、受講者が所属する部署の事例で検討してみることで、実際の活用を具体的に理解し、看護実践能力の向上に繋げることができるのではないかと考えた。</p>
2-5 ※ 具体的な取り組み内 容 (800字以内)	<p>院内レベル別研修(対象者ラダーレベルⅡ)「家族看護」の受講者を対象に、研修の学びを臨床の実践の場で活用できることを目的に、所属部署での家族看護カンファレンスを開催することを研修の事後課題とした。方法は以下①～④である。</p> <p>①事前に研修講師である家族支援専門看護師に事例の選択とその理由を伝え、カンファレンスで話し合うことの焦点化を行う。(受講者がこれまでの経験の中で困難さを感じた実際のケースを選択する)</p> <p>②カンファレンス前に事例のジェノグラム、エコマップを描く</p> <p>③講師の家族支援専門看護師はカンファレンスに参加し、受講者の司会進行をサポートする。</p> <p>事例の家族アセスメント、支援の方向性について、ディスカッションする。</p> <p>④受講者はカンファレンスの学びをまとめ、講師がコメントをする。</p> <p>このように、研修後、学んだことを受講者の経験している実際の事例を通して、再度学習することは、学びの理解を深め、実際の臨床の場で活かす方法の具体的な理解に繋がる。また、集合研修では所属部署ごとの特徴を加味した内容は十分学べないため、それらを補足する機会となる。また、自分達の行ってきた看護の振り返りを行う機会となっており、事例からの学びを共有し、看護の楽しさやモチベーションの向上につながったとの意見がある。毎年、全部署より受講者がいるため、年に1回各部署において家族看護のカンファレンスが行われている。また、この事後課題以外でも家族看護カンファレンスが必要時開催されている病棟が増えてきている。</p>
2-6 ※ アピールポイント 創意工夫した点、成 果とされる点 (400字以内)	<p>この取り組みは、集合研修での学びをもとに、受講者自身が実際の事例でアセスメントすることができる。そして、気になる家族の事例に対し、必要時、所属部署における家族看護カンファレンス開催の定着に向けた取り組みともなっている。</p> <p>また、看護師の家族看護に対するの苦手意識やケアの困難さを少しでも軽減する一助となり、看護ケアの質向上にも貢献できると考える。</p>

参考事例 ②

家族看護グッドプラクティスアワード 2023年度 家族看護グッドプラクティス賞 応募用紙

※印は記入必須項目です

1. 基本情報	
1-1 ※ 応募代表者	ふりがな ●● ●● (所属施設:)
1-2 共同応募者	●● ●● (所属施設:)
	●● ●● (所属施設:)
1-3 ※ メールアドレス	* 選考や連絡に関して事務局とのやり取りに使用させていただきます ●● @ ●●
2. 応募内容	
2-1 ※ タイトル	認知症カフェを活用したことで、患者が新たな役割を見出すことにつながった事例
2-2 応募対象 もっとも重視して審査してほしい視点をお選びください (1つだけ選択)	<input type="checkbox"/> 人材育成・教育 <input checked="" type="checkbox"/> 設備やシステムなどの充実 <input type="checkbox"/> 看護技術の向上
	<input type="checkbox"/> 実践のプロセスの発展 <input type="checkbox"/> 看護計画の改善 <input type="checkbox"/> 多職種との連携
	<input type="checkbox"/> 患者・家族の満足度向上 <input type="checkbox"/> 職員の満足度向上 <input type="checkbox"/> 取組み評価の体制作り
2-3 取り組み開始年	年 ~ 年
2-4 ※ 取り組みに至った背景・経緯 (400字以内)	A氏は、脳出血のため、右片麻痺、構音障害があり、また、気分が落ち込むと食事やリハビリテーションを拒否するという行動がみられていた。A氏は夫と二人暮らしで、夫が介護を続けている。夫は今後の在宅療養への不安な気持ちが強まることもあり、その都度、夫の情緒的支援などを実施してきた。
2-5 ※ 具体的な取り組み内容 (800字以内)	情緒的支援を実施する中で、家族のライフストーリーを聞く機会があった。A氏は今まで精力的に仕事に取り組んでいたとのことだった。夫はそのようなA氏を誇らしく思っており、それだけに、今の拒否的なA氏を見るのが辛いと語られた。 A氏が拒否的な原因を夫と話し合ってみたところ、「まだまだ働きたかった人なので、病人だけやらされているのが辛いんじゃないか」という意見であった。確かにA氏自身の食思不振がある中でも、同じロビーで食事をしている認知症高齢者にやさしく話しかける様子が何度かみられていた。 当該病棟では、一つの病室を改装した認知症カフェが運営されていた。そこで、認知症カフェ開店日には、A氏にはスタッフ側の人としてカフェの中で動いてもらうという新たな取り組みを起案、実施した。 その中で、A氏が生き生きとする時間をもつことができ、そのようなA氏を夫が目にすることで夫も嬉しい気持ちになるという好循環が図れるという家族全体に働きかけることができた。
2-6 ※ アピールポイント 創意工夫した点、成果とされる点 (400字以内)	患者に認知症カフェで役割をもってもらうという新たな取り組みが了承されるために幾つかの困難があったが、病院という患者役割を強いる場所で、患者に新たな役割を創出した取り組みであった。